

は特に然りといはれる。然し乍ら外國史料である故にその正確さが疑はれる向もあるが實際は意外に正確なものであるといふ事は又定評のある所であつた。この度の調査はそれを更に實地に於いて確めようといふ譯であり、その結果は清初史研究の分野に新なる見解が挿入されるに至つた。今調査の内容を窺ふに、全體の結構は大體四篇に分れ、その内興京二道河子舊老城訪問記、申忠一圖録解説の二篇は稻葉博士の手になり、史料と實地との比較検討がものされ、第三篇に書啓及び圖録の全文が載せられてあり、四篇の二道河子舊老城報告によつて遺蹟の實際情況が報告されて居る。そして我々はその調査の目的が大體達成されて居る事を知り、實地によつて裏付けされた史料の記述は現實感を伴つて我々に話しかけてくる事を感じるであらう。方に百聞は一見に如かずである。そしてそこに幾多重要な意義が見出される。實際この種の企てといふものは國史にあつては日常茶飯事の事であるが、外國史の領域に於て然も我が國人の手によつて行はれたといふ事は特筆されねばならぬ。清初史の研究は近時目覺しく進展したが今や國史並に根本的な研究法が行はれる迄に到達し得た様である。かくて一段と高い正確さが得られることになる譯で、これは中々の進歩である。かく考へる時、本報告が現地の大學の研究報告の最初のものとして刊行された事は誠に意義深きものがある。この調査は清初史實の闡明が第一の目的であつたが副産物として更に價值多きものが見出される。例へば二道河子山城の構造に於いて女眞民族特有の形式が見られる事又これが我國武家時代の築城の

様式の對比の事も考へられ、英傑ヌルハチ汗の作つた城といふ史的興味を離れて民族の生活形態の變遷、比較等の類型的立場から新なる興味が齎される、滿洲の地にこの種の遺蹟遺物が數多存在して居る。話は違ふが從來死語と思はれた滿洲語及同系統の言語を繰る民族は尙現地に生活して居る。かういつた程のもの徹底的の調査は古來からの習慣傳統が未だ失はれて居ない今日早速にも着手さるべき事業の様である。この方面のものとして今迄にシロコゴロフの業蹟、凌純聲の勞作以外は誠に寥々たるものがあり、本邦人の手にかゝつたものは殆ど見當らない。かく思ふ時現地の大學の使命は誠に重大である。今本報告を手にしてそれ等の實現される時の間近なるを豫感し喜びに堪へない。今日流行の未開族の研究もこゝに於て一役買はるべく、徒に紅毛人の業蹟にのみその所産を仰ぐべきでもなからう。それからこれは餘事であるがこの報告は清初史研究の權威稻葉博士の最後の勞作となつた事である。我々の尊敬する大先達はその死の直前迄研究に熱情を傾けられ後進を誘導された眞摯さは誠に頭が下がるものがある。今博士を失つて、この學問の領域に於ける索漠さが一入感ぜられるものやあなたがも筆者一人ではあるまい。謹んで故博士の偉大さをしのぶものである。(新四六倍判、康徳六年十二月發行) (三田村泰助)

ヘルシ了宗教思想

足利 悳 氏 著

古代世界はエドワード・マイヤー以來地中海世界と呼び慣され、我國に於いても最早疑問の餘地なき表現として受容されてゐるかの如く見える。併し地中海世界として古代世界が時間的空間的統一體として把握されるためには特にギリシア・ローマ世界と所謂古代東方との歴史的關係の統一性が事實を以て立證されねばならぬ。廣義の近世ヨーロッパが一の理念的統一體として有機的統一をもつやうに、所謂古代世界もマイヤーの言ふやうに原始時代よりローマの没落に至る迄、單一の世界性をもつたのであらうか。古代東方の世界はそれ自體として獨立せずたゞ希臘・ローマの歴史であつたのであらうか。——古代史の世界史的秩序を考察しようとする者にとつては、古代東方と希臘・ローマ世界との歴史的關係如何といふ問題が、秩序構成上の極めて重要な課題となるのである。それには先づ古代東方そのものの歴史的内容が明確にされねばならない。而るに同じく古代東方と云ひながらも、アツシリア、バビロニア、ペルシア、古代エジプト等はそれ〴〵特殊な文字と文化とを持ち、それ等の一つ一つの研究さへ實に容易ならぬ努力を必要とする。いはんやそれ等のものの前後的又並立的關係の明確な把握は殆んど不可能に近い。殊に希臘・ローマの文獻・遺物によつてのみ西洋古代を研究する者の側からは古代東方を論ずる資格は絶無であると言つてもよいのである。アベントランド研究者は隨つて謙虚な心を以てオリエント研究者の成果に耳を傾け、靜に自己の研究領域とオリエントとの關係を思索しなければならぬであらう。

所で古代東方のうちでペルシア程希臘・ローマ世界との關係が深いものはないであらう。ペルシア戦争、アレクサンドロススのペルシア遠征、ローマ世界に流行したミトラ信仰、アウグスチンとマニ教等の目ぼしい事實を摘出してでもペルシアはたしかにペルシアのみの歴史に終始したのでなくて、よしペルシアにとつては尙周邊的事實に過ぎないとしても、希臘・ローマ世界と無縁の存在ではない。ペルシアとは本來何か、はわれ〴〵に於いても深い關心の對象である。

本書はペルシア史全體の叙述ではなく、ペルシア思想の中心を構成するその宗教思想の緻密な研究の發表である。著者は久しくペルシア語を大學で講じつゝあり、困難な語學的ハンディキャップを乗り越えて親しくアゾエスタを通して、確固たるこの根本史料を驅使しつゝ、こゝにペルシア宗教思想を精密にして明晰な叙述を試みたもの、洵にその人を得たと言はねばならぬ。本書は通常知識人の教養としてよりも、更に高級な學究者の友であるであらう。世界中の現情は單にヨーロッパのみならず、中亞、極東を新しい關心の上に齎しつゝある。けれども本書の價值は泡の如くあらはれては消える底の現實的關心に結びついてゐるよりも、更に高く又深い學問的關心にこたへる所にあるであらう。

本書の内容を一々紹介する違はないが、おさめる所は 一、原始イラン民族の宗教思想 二、波斯宗教思想の特質 三、波斯の諸宗教の三章、最後の章は更に、一、マズダ教とザラツシユトラ、二、マニ教、三、マズダク教、四、ミストラ教の四節に分れ

る。我々は本書に於いて未知であり、又その言語的困難さの故に到底到達し得ないベルシア宗教の本質とその獨自の發展を知ると共に、特に第三章に於いてキリスト教思想成立とヘレニズムの神祕諸宗教との關聯を一層明確になし得るに至つたことを深く喜ばねばならぬ。が而も結局ベルシア宗教思想は西歐的キリスト教とは相對立するもの、キリスト教世界は尙ベルシア宗教思想の支配する世界とは異質的世界であることを推察せしめるのであつて、こゝに古代世界の秩序考察に深い示唆を與へるものと言へるであらう。(弘文堂發行 定價五拾錢) (井上智勇)

Georg Weise: Die geistige Welt der Gotik und ihre Bedeutung für Italien.

中世末期から十四世紀に至るゴテイツク精神風靡の時代、十五世紀に於ける新しい自然主義の全盛、この兩者は共に全歐的精神運動であり、迺は伊太利ルネサンスも全歐的ナルネサンスと行動を共にしたと云ひ得るであらう。しかし十五世紀の中頃以後から十六世紀にかけて北歐に於て後期ゴテイツクの様式が再び榮えて文化のゴテイツク化が行はれたとき、獨り伊太利はこの傾向を離脱し十五世紀の自然主義を克服するに古代の理想を以てした。かゝる盛期ルネサンスに於ける古典古代との新な關係による自然主義の克服にこそ伊太利の歴史的特殊性が見られる。ルネサンスにはこの自然主義的傾向古典古代的傾向の二重性が存すると云はねばならない。

以上が數年前ワイゼが發表したルネサンスの二重概念なる論文の概要である。結局彼は北歐のルネサンスにゴテイツク精神の一貫した流れを認めるに對し、伊太利に於ては古代精神に基くゴテイツクの克服なる非連續面を主張しその點に南歐と北歐の區別ある事を明かにしたものであつて傾聽す可き見解たるを失はなかつたのである。ところでゴテイツクは北歐精神の權化であり中世文化の究極であると考へらるが故に北歐ルネサンスの根柢を爲すものがこのゴテイツク精神であるならば、北佛及びフランドルを中心とする北方のルネサンスを中世の末期的現象として、その末期性に於て捕へたホイジンガの見解は正に正しいと云はねばならぬ。しかるに伊太利ルネサンスの本質はワイゼの言ふ如くゴテイツクの克服に外ならないと考へられる。ゴテイツクは盛期ルネサンスの前驅的段階にあるのではなく、換言すればゴテイツクの直線的發展が盛期ルネサンスへ導かれるのではなくゴテイツクは正に克服せらる可きものとして意味を持つのである。ヴァザリの名匠列傳を繙くものは、彼の中世様式に對する惡罵の痛烈さに驚くと共に、中世様式、ゴテイツク様式、ドイツ様式の三者が殆んど同一視されてゐる事に直に氣附くであらう。彼——十六世紀人——の中世美術に對する非難は結局アルプス以北のそれへの惡罵に外ならないのである。之からしてもゴテイツクが如何に伊太利人に理解し難いものであつたかを我々は容易に察知し得るのであるがもとより伊太利ルネサンスとゴテイツクとの關係はヴァザリが考へた様に單純皮相なものではない。殊にゴテイツクは單に美